

第7章 中国と出会った北京の三年

最初に出会った北京の友人

北京で、「新しい友人」となった最初の中国人。それは特派員として着任後、一カ月余り投宿していたホテル・新僑飯店詰めの、タクシー会社の運転手さんだった。五十がらみの、物静かで、どこか知性をたたえたおじさんだった。今は昔、もう二十五年以上も前の話である。

運転手のおじさん

日中国交正常化（一九七二年九月二十九日）の直前とあって、日本からの要人の往来が激しかった。そのたびに、飛行場通いが続いた。ある朝、周恩来首相、摩承志中日友好協会会長らとの重要会談を終えて帰国する、著名な政治家を見送りに行くときだった。これが、運転手さんとの初めての出会いだった。

空港へ通ずる大通りの両側には、職場へ向かう自転車の群れが、延々と続いていた。この間を、大型のトロリーバスが、せわしげに行き交っていた。沿道には、緑したたる街路樹が、どこまでも切れ目なしに続いていた。

日本から来て間もない私の目には、この朝の光景が、とても新鮮に映った。と同時に、東京の出勤風景が、まぶたに浮かんだ。ごった返す電車や地下鉄。数珠つなぎの自動車の大群。積もる排気ガスで、息も絶え絶えの街路樹一。

「北京の朝はいいですね。自転車での出勤も、とても健康的だなあ」

思わず、こんな声を発していた。すると、運転手さんが言った。

「日本は、とても工業が発達しているそうですね。それに比べれば、中国はまだまだ立ち遅れていますよ」

おじさんとの会話は、こんな形で始まった。その後、この運転手さんと、よく出会うようになった。五回、六回と車に乗せてもらう間に、お互いの気持ちも、次第に通い合うようになった。

拒まれた写真撮影

日中復交の大行事も終わった、ある秋晴れの日。北京市の西北、七十余キロの八達嶺にある「万里の長城」を訪れた。このときも、おじさんのタクシーに厄介になった。「不到長城、非好漢」（長城に到らずんば、好漢にあらず）中国各地から大勢の人々が詰めかけ、行く秋を心ゆくまで楽しんでいた。

八達嶺の頂上を極めた後、農村の風景を堪能しながら帰路についた。取り入れは盛りを過ぎていたが、まだあちこちで農作業が進められていた。やがて、道路の左手に、アワの収穫に余念のない、農民の集団が見えた。この情景をカメラに収めたいと思い、おじさんに告げると、「試してごらんなさい」と言って車を止めてくれた。

女性ばかりの集団作業だった。しかし、彼女たちは、背広姿のよそ者の不意の“侵入”に、当惑げな目を向けた。まだ文化大革命下で、閉ざされた、お行儀のいい時代だった。思い切って来意を告げ、カメラを構えようとしたとき、年配のおばあさんが顔を上げ、「やめてほしい」

と言った。何の連絡もなしに、一人で飛び込んできたこの男は何者か。どんな意図でやってきたのか—彼女たちは、きつこう考えたに違いない。

私は、このおばあさんの要求に従った。普通、見学や取材には、中国側の案内役が付くのが、当時のならわしだった。だが、私には日本で育った新聞記者の習性が身についていた。それに悪意はもうとうなかった。しかし、「入郷随俗」（郷に入れば郷に従え）という。この取材は、断念しなければならないと思った。

おじさん、交渉役に

しばらく行くと、今度は道路の右側で、大勢の農民たちが、取り入れの済んだ畑に、クワを入れている姿が目に入った。その間をぬって、トラクターが鮮やかな紅の車体を運んでいる。この躍動的な光景を見たとき、また“職業意識”がわいた。おじさんに話すと、静かに「やっでごらんないさい」と言って、車を止めてくれた。

あぜ道を走って、トラクターに近づいていった。だが、ここでも結果は同じだった。農民たちは、戻っていく私の背に、「また、いらっしやい。今度はぜひ案内役の人と一緒にね」と声をかけてくれた。これがせめてもの慰めであった。惜しいチャンスを逃した、という気持ちが残った。私の脳裏には、「北京の秋」を写真グラフにして、日本の読者に伝えたい、という欲求があった。

車はもう、北京の市街地へかなり近づいていた。半ばあきらめの心境になっていたとき、今度は収穫したトウモロコシの皮むき作業にいそしむ、子供たちの集団にぶつかった。性懲りもなく、グッと心が動いた。

運転手のおじさんに、三たび声をかけた。彼は振り向きながら、「あなたは人がいい。黙って撮りなさい」と言った。ためらいつつ、車を降りてカメラを向けた。このとき、子供たちの作業を見守っていた老人が、手を大きく横に振り、「不行！！」(ダメだ)

と叫んだ。私はシャッターを押す手を止めた。三度目の正直という空念仏も、見事に、拒否されてしまった。

だが、そのとき、運転手のおじさんが車から降りてきた。彼は何も言わずに、道路わきの大きなミゾを渡り、「ダメだ」と叫んだ老人の方へ歩んでいった。そして、何かしきりに、老人に説明していた。気持ちが通じたのか。二人がこちらを向いて、

「来吧！」(いらっしやい)
と言った。運転手さんは、私のぶざまな姿に同情して、“案内役”を務めてくれたのだった。ホッとして作業場へ飛んだ。皆が、ニコニコ顔で迎えてくれた。その情景を前に、何度もカメラのシャッターを切った。

「毛沢東一色」の裏側に

文革下の厳しい規制があったのか。それとも、見知らぬ相手の「被写体」となる習慣がなかったからか。

三度試み、三度とも拒絶されたことに、私は中国人の中にある「けじめ」の姿勢を強く感じざるを得なかった。

と同時に、運転手さんの誠意と勇気に、頭が下がった。おじさんとして、もの分かりの悪い日本人を相手に、どんなにか当惑されたことだろう。だが、「あなたは人がいい。黙って撮りなさい」と言った彼は、私が拒否されたとき、自分が言った言葉の責任をとり、きっぱりと行動に移して、交渉に当たってくれたのだった。

ところで、この運転手さんとの間には、もう一つ、忘れ難い思い出話がある。

あるとき、彼は「田中首相は、日本でずいぶん人気があるでしょう」と問いかけてきた。「ありますよ。日中国交正常化を実現したという、時の勢いにのっているから」と言った私は、続けて「あるといっても六割ぐらいかな。日本人にはいろんな考えを持った人々がいますから」と答えた。

すると、おじさんは「中国でもそんなに変わらない。毛主席の語録はたくさんあるけれども、毛主席を神様のように思っている人は、六割から七割の間でしょう」と語った。

当時、街頭の看板という看板はすべて、毛主席のスローガンを掲げたものばかり。本屋に行ってもその著作であふれていた。まさに「毛沢東一色」の世界だった。

だが、その裏側に、こんな“実態”があるのか、とこれは一種の驚きに似た新発見だった。そして、外国人の私に、さりげなく、こんなことまで打ち明けてくれた運転手さんに

対して、同じ人間としての限らない信頼感を覚えたのだった。

「言必信、行必果」

その後、私たち一家は新僑飯店を出て、建国門外・齊家園にある北京支局に移った。間もなく、新僑飯店は改築工事のため、半年ほど閉鎖されることになった。あの運転手さんたちも、これに伴い別の場所へ移動していった。忙しい日が続き、おじさんのことも次第に脳裏から遠ざかっていった。

幾月か過ぎたある夜、新しく出た『人民中国』（一九七三年一月号）に目を通してるときだった。「沁園春—中日国交回復を祝す」の一句が、運転手さんの記憶を生々しく呼び覚ました。今は亡き中日友好協会の郭沫若名誉会長の詞であった。日中間の二千年の友誼を回想しつつ、国交正常化の意義をかみしめるこの詞の最後は、

「従今後、望言行信果、和睦万邦」

と結ばれていた。漢文読みにすれば、「今後より、望む、言行信果にして、万邦と和睦すを」一となるのだろう。目に留まったのは「言行信果」という言葉だった。

これは「言必信、行必果」からきている。そう言えば、国交正常化交渉の大詰めで、周恩来首相が田中首相に贈った毛筆の書と同じもの。「言うことは必ず信、行いは必ず果断」という意味である。

まぶたの奥に、「老人の方へ歩いていった」あの運転手のおじさんの姿が、くっきりと浮かんできた。

劇的だった鄧小平さんの復活

北京特派員時代の思い出話は尽きない。だが、ここでは、文化大革命の後半期に現れた象徴的な動きと、日中関係にまつわる体験的エピソードを、一つずつ取り出しておきたい。

人民大会堂から第一報

一九七三年四月十二日の夜。北京の人民大会堂で、カンボジアの解放区視察から舞い戻った、シアヌーク殿下夫妻の歓迎パーティーが催されたときのことだ。大宴会場に、いつもと違うざわめきが起った。

主賓たちの居並ぶ席に目をやると、小柄で血色のいい鄧小平氏の姿が見えるではないか。同席の外務省報道局の人が静かに、鄧小平さんが「副首相」として復活したことを告げた。文革の初期、紅衛兵集団から、劉少奇国家主席に次いで「資本主義の道を歩む実権派第二号」と激しい批判を浴び、一九六六年十二月に公の場所から姿を消して以来、実に六年四カ月ぶりの返り咲きだった。

「一刻も早く、この大ニュースを東京へ」と思った。しかし、当時は北京から東京への取材連絡は、北京支局あるいは電報局から、というのが慣習で、人民大会堂から東京本社へ直接電話がかけられるなど、想像もできぬことだった。だが、あのときの「鄧小平復活」のニュースは、外国人だけでなく、中国人にとっても、大変な朗報だったのだろう。外務省のお役人を強く促すと、彼はついに首をタテに振った。そして、黒幕で仕切られた大宴会場の向こう側に、電話機があることを教えてくれた。

まさに、電話機はそこにあった。すぐさま電話局を呼び出すと、聞き慣れた交換嬢の声だ。「シメタ」と思い、「受話人付費」（コレクトコール）と言って東京本社の電話番号を告げると、すぐにつないでくれた。

「鄧小平復活」と言って、あとは頭に浮かぶまま、この日の情景と、過去のいきさつ、復帰の意味を伝えた。

北京空港で言葉交わす

外部では、鄧小平氏が公の場所から姿を消して以来、劉少奇氏とともに、完全に失脚し

たと見られてきた。しかし、「林彪事件」（一九七一年九月）後、文革後期にとられた「前の過ちを後の戒めとし、病を治して人を救う」という毛沢東主席の大方針に基づき、文革初期に批判された指導者の中から、大物幹部たちが次々と返り咲いていた。この中には、かつての党副主席兼副首相だった陳雲氏、また共産主義青年団の総書記だった胡耀邦氏らもいた。

しかし、一連の措置が、鄧小平氏の復帰という段階にまで達したことは、特筆に値する象徴的な出来事だった。そこには、大動乱の文化大革命と、衝撃的な「林彪事件」によって生じた党・政・軍、とりわけ軍内部の人事面での“後遺症”の是正と、米ソ両超大国の動きをにらんだ新たな国際戦略の創出など、重大な任務が待ち受けていた。

その鄧小平さんと、じかに言葉を交わす機会が三日後に訪れた。それは四月十五日、中日友好協会訪日代表団（団長、廖承志会長）の一行五十五人が、北京空港を飛び立つ朝のことだった。そこには、李先念副首相に伴われて、復活したばかりの鄧小平氏の姿があった。中国側からは郭沫若全国人民代表大会常務委副委員長・中日友好協会名誉会長、傅作義政治協商会議全国委副主席ら各界の代表。日本側からは小川平四郎大使ら北京にいる邦人たち、総勢ざっと五百人が見送った。

人々の視線は、鄧さんの一挙手一投足に注がれていた。中国外務省のお役人の制止を振り切るように、私は至近距離まで進み、「我們日本人感到非常高興」（われわれ日本人も、とても喜んでいきます）と話しかけた。

鄧小平さんは、ややまぶしげな表情だったが、張りのある声で「謝謝、謝謝」と応えてくれた。

軍の大異動に大ナタ

その復活は、厳しい階級闘争と学習活動を強いられてきた、北京の一般市民にとって、大きな“清涼剤”となった。当時、巷では鄧さんに対するこんな評価が吹き出していた。「敢説、敢做」（はっきり物を言い、敢然と実行する）。「很公平」（非常に公平だ）。「工作能力恨強」（実務能力がすごい）。

これらを裏付けるように、鄧小平氏はバリバリと仕事をし、その地位もグングン上昇していった。文革前、党中央の日常業務を采配していた彼は、文革初期の激しい批判の中で、党内外のすべての職務を剥奪され「一党員」の地位にまで落ちていた。

だが、七三年八月、ほぼ四年半ぶりに開かれた中国共産党第十回全国大会で、まず「党中央委員」に。翌七四年一月一日に公表された建国以来最大の軍部異動をめぐり、大きな功績があったとされ、早くも「党中央政治局委員」に昇格した。

これは、文革前半期に人民解放軍を牛耳っていた林彪將軍時代のひずみを是正するもので、当時、全国に存在した十の一級軍区と一つの直轄軍区（新疆軍区）のうち、九軍区の司令を変えるとという至難の仕事だった。しかも、この異動の大きな特徴は、①従来、軍区司令が党・政・軍という、その地区の三つの大権を一手に掌握していた力を分散させ、②司令というシャッポの異動に伴い、重要な幹部たちを同行させた慣習をやめ、ほとんどシャッポだけを動かしたという点だ。

この大ナタを振るったのが、毛主席と周首相の強い指示と要請を受けた鄧小平氏だった。

国連で「三つの世界論」

そのころ、何とも寂しい知らせが伝えられた。一九七四年一月十一日、鄧小平副首相が北京訪問中の自民党代議士らと会見した際、「周恩来総理は多忙な上に、高齢に達していることもあり、われわれが手分けして客人とお会いすることに決定した」と述べたのである。

この決定は、やがて徐々に実施に移されていった。諸外国の元首や首相の訪問に際しても、ホスト役は明確に周首相の名義でありながら、実際には鄧小平、李先念両副首相らが「周恩来総理の委託を受けて」と発言し、代役を務めることが多くなった。

中でも、従来周首相の職務を最も多く分担していったのは鄧小平さんだった。それが

いよいよ鮮明になったのは、同年四月の国連資源特別総会に、彼が首席代表として乗り込んだことだろう。

あのときの見送りの光景も、強く印象に残っている。北京空港には周首相を筆頭に、林彪失脚後の第十回党大会（七三年八月）で大躍進を果たした王洪文党副主席、江青女史（毛主席夫人）、姚文元党中央政治局委員ら「四人組」の面々。他方では鄧小平氏とともに「実務派」の代表格だった李先念副首相ら、党と国家の最高指導層がずらりと顔をそろえ、数千人の北京市民が熱烈に歓送した。

この情景を見たとき、私はこれが「外」に対すると同時に、より強く「内」に訴えるものであると感じた。その最大のねらいは、激しい文革の嵐の中で批判された人々の自信を回復させ、晩年の「毛沢東路線」—「継続革命」と「現代修正主義批判」の基礎の上に、新たな団結をアピールすることにあった。

この国連特別総会で、鄧小平さんは、中国の新たな国際認識として、世界を①二つの超大国、②発展した国々（日本、西欧など）、③発展途上国（いわゆる第三世界諸国）—に大別する「三つの世界論」を初めて公にした。そして、中国を発展途上国と位置づけ、「第三世界」との連帯を強調するとともに、「第二世界」との友好の輪を広げ、「第一世界」の米ソ両超大国、特にソ連指導部との対決姿勢を明らかにしたのである。

毛・周に次ぐ実力者へ

彼は、内外政策の推進と成果を高く評価され、新たな党中央委総会で党副主席兼党中央政治局常務委員へと昇進。七五年一月の第四期全国人民代表大会第一回会議では、第一副首相に選出され、さらに同月二十九日には、解放軍総参謀長への就任が確認された。

当時、毛主席、周首相に次ぐ党中央の「ナンバー3」の座には、文革イデオログだった「四人組」の若手のホープ、王洪文副主席が座り続けていた。だが、鄧小平氏は、党・政・軍の各分野で、押しも押されもせぬ枢要な地位を占めるに至った。

その後の刮目された動きは、七五年四月に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金日成主席が訪中したときだ。極めて重要な兄弟国の党と国家の主席の来訪で、鄧小平氏は接待の主役を務めた。私の北京滞在中、最大の歓迎ぶりだったこの場で、金日成主席とオープンカーに乗り込み、数十万の大観衆に迎えていた郵さんの姿は、彼が毛主席、周首相に次ぐ「実力者」であることを、強く印象づけた。

このように、復活後の鄧小平氏の足跡を、時期を追って振り返る限り、その昇進と活躍ぶりは、ひととき目立つものであった。それが絶頂期に達した一九七五年の盛夏、私は北京特派員の任期を終え東京へ戻った。

だが、「禍中有福、福中有禍」（禍の中に福が宿り、福の中に禍が宿る）という。輝かしい足どりのカゲで、鄧批判がくすぶりつつあったことも、半面の事実であった。

「赤い夕陽」と「大慶油田」

北京に赴任して二年近くたった一九七四年の夏。北京駐在の外国人特派員団は初めて、東北地方（旧満州）に出現した中国最大の石油基地、大慶油田を見学する機会を得た。「農業は大寨に学び、工業は大慶に学べ」—一九六四年、毛沢東主席が全国にこんな号令を発してから、ちょうど満十年に当たっていた。それは、第四次中東戦争のあおりで、日本が深刻な「オイル・ショック」に見舞われているころでもあった。

中国最大の石油基地へ

大慶油田で、大量の原油が噴出したのは、一九五九年だった。新中国誕生の満十年後に訪れた快挙だったので、そのめでたさにちなんで、この名が付けられたのだという。「大慶」とは、文字どおり「大きな慶び」という意味だ。

一九五九年以来、三年間続いた大きな自然災害。その中で生じたソ連技術者、専門家の突然の引き揚げ。これらを反映した中国共産党内部の激しい「二つの路線」の暗闘―大慶油田の開発は、内外多難の真ただ中で進行した。「自らの足で立て」という、毛主席の至上命令であった。「牛は最も精を出し、最も享楽を求めぬ動物だ。生涯を甘んじて、党と人民の牛になろう」「自力更生、刻苦奮闘は、われわれの“伝家の宝刀”であり、国家建設の万年不変の方針だ」―大慶油田開発の先頭に立ち、不幸にもガンで倒れた「鉄人」、王進喜さんの残していった言葉だ。

この大慶油田の出現で、中国は一九六三年、基本的に石油を自給できる国となった。この後に勝利油田、大港油田の開発が続き、さらに山東省で六・二三油田、湖北省で五・七油田を掘り当てた。その後、四川省、甘肅省などでも新油田が発見された。こうした中で、少なからぬ外国人専門家たちが、長年にわたって主張していた「中国貧油国論」は覆され、この国の工業近代化への大きな基礎をつくった。

石油危機の日本へ輸出

外国人記者に対する、大慶油田の初公開とあって、北京駐在の特派員団の大半が、この取材旅行に参加した。この中には、ソ連のタス通信の記者二人も含まれていた。裏を返せば、ソ連技術者の全面撤退にもかかわらず、中国が「自力更生」の成果に、はっきりと自信を持った証拠とも読み取れた。

私にとっては、生まれて初めての東北地方への旅であった。だから、大慶油田の視察とともに、東北の大地に触れることも大きな楽しみであった。

酷暑の続く七月二十四日の夕刻、われわれは北京駅発の「特快火車」（特急列車）で、まず黒竜江省の省都、ハルピンへと向かった。夜明けとともに、列車は東北地方最大の都市、瀋陽駅に着いた。

ここで初めて、原油を満載したタンク車の列に出合った。大慶油田から遼東半島の先端にある旅大へ運ばれるもので、この大部分が日本へ輸出される、と聞いた。この後、ハルピンへの道程で、五十台から六十台もつながった石油タンク車を何度も見た。まさにピストン輸送の真っ最中だった。

第四次中東戦争の発生は前年の十月。これを契機にアラブ諸国が「石油戦略」を決定し、原油の供給量が減り、価格が暴騰した。これは、石油の大半を中東地域に頼ってきた日本を直撃、同年十一月には深刻な「石油危機」に陥り、狂乱物価の現象を生んだ。トイレット・ペーパーの買いだめに走る主婦たちの姿が、中国でも話題になっていた。

このため、七三年暮れから七四年春にかけて、日本からは中国石油の供給を求めて、石油業界や財界首脳ばかりでなく、政界代表団の訪中も目立つようになった。ついには、社会党元委員長の佐々木更三氏までが来訪して周恩来首相に会い、懸命に“油乞い”をする状況だった。佐々木さんが「チミ（きみ）、農村のビニールハウスを暖めるのに必要なんだよ」と語っていたのが印象に残っている。

車窓から見た東北の大地

瀋陽―長春―ハルピンへ至る東北地方（旧満州）の大平原には、右も左も見渡す限り、アワ、キビ、小麦、大豆、トウモロコシが、青々と息づいていた。この旅に出る直前、西側の一部では、東北地方の夏作は芳しくない、という情報が流れていた。広大な中国のことだからとも思ったが、南北を結ぶ大幹線の車窓から見る限り、そんな気配は少しもうかがえなかった。

抜けるような青空。沿線のところどころに、背の高い向日葵が、大輪の花を咲かせていた。中心部の茶色と、周りの黄色が、白日の太陽の下で、くっきりと鮮やかに映えていた。

北京からハルピンまで全長千三百八十八キロ、特急で十八時間の旅であった。われわれはここで小休止の後、午後二時すぎ、チチハル方面行きの列車に乗り込んだ。目指す大慶油田の基地駅の一つ・薩爾図は、ハルピンとチチハルのほぼ中間に位置している。

窓外には、相変わらず、大平原が展開していた。二時間近く走っただろうか。やがて、小麦やトウモロコシに代わって、草原が目につくようになった。しばらく行くと、今度は草原のあちこちに・白っぽい土が現れ出した。だれかが、アルカリ性の土壌だと言った。列車は、どうやら大慶油田の東端へ差しかかったようだ。

今昔を語る赤い夕陽

真っ赤な夕陽が、いつの間にか、行く手遥かな地平線に近づきつつあった。いままで、どこで見た夕陽よりも大きく、深紅に映えていた。われわれを乗せた列車は、この沈む太陽を追いかけるように走った。

突然、幼いころに覚えた「軍歌」の一節がよみがえってきた。

「ここはお国を何百里
離れて遠き満州の
赤い夕陽に照らされて
友は野末の石の下」

私は中学二年生のときに「敗戦の日」を迎えた、戦場を知らぬ世代に属する。だが、小学生のころから、たくさんの「軍歌」を習った。どの歌にも、あの戦争を調歌する“勇ましい”文句とメロディーがあった。だが、この歌には、戦場で倒れた友人を思う心情と、哀調を帯びた旋律を感じていた。生まれて初めて見た東北の「赤い夕陽」は、なぜか、少年時代のそんな感傷を思い起こさせたのだった。

だが、この歌のカゲで、日本の侵略戦争はひたひたと進められ、罪のないおびたしい数の中国の人々に、取り返しのつかぬ残酷な犠牲を与えてしまった。「満州事変」は「支那事変」へと拡大し、さらに「大東亜戦争」へとつながっていった。

幼き日、われわれはこの一連の戦争を「聖戦」と教えられ、「八紘一宇」「大東亜共栄圏」の理念に基づくものだ、とたたき込まれた。被害は日本の国民にも降りかかった。「新体制」を当然のこととして育てられた日本の若者たちは、無残にも「犬死に」へと追いやられた。

中国を含めたアジアの人々の目から見れば、「聖戦」の実体は、まさしく「東洋制覇」の野望にほかならなかった。そして、その「覇権主義」ゆえに、自らを破滅に導いたのである。

油にまみれた若者たち

赤い夕陽を背に受けて、また、真っ黒な石油タンク車の長い行列がすれ違って行った。大慶油田で働く中国の労働者たちは、大きな使命を帯びて、自国のためだけでなく、石油危機に直面している日本向けの原油を、懸命に送り出している。

日中関係の今昔、そのコントラストが、痛く胸に突き刺さった。「子々孫々の友好を、しっかりと築き上げていかなければ」沈まんとする赤い夕陽が、こんなふうに語りかけているように見えた。

その絶景が終幕を告げんとしたとき、列車は静かに薩爾図駅に着いた。

大慶油田は、この駅を挟んで、東西南北へ大きな広がりを見せていた。仲間の一人が、一体どのくらいの面積を持つのか、と尋ねたが、案内役は、笑顔をのぞかせただけで、質問には答えてくれなかった。

だが、見学で判明したことは、大慶油田がなおも、北へ北へと大きく拡大されつつあるということだった。その証拠に、いくつものボーリング隊が北へ移動し、せわしそうにドリルをぶち込んでいた。どのチームも二、三人の老練な責任者を除いて、大半が紅衛兵出身の二十二、三歳の若者たちだった。彼らの作業服ばかりでなく、その顔までが油まみれになっているのが、強く印象に残った。

広大な平原には、中国製のトラックに混じって、日本製のものも活動していた。また、採油に必要な日本製のシームレスパイプが使用されているという説明を聞き、日中関係の進展ぶりがうかがえて頼もしく思った。

「日本への石油を遅滞なく、立派に輸出するように。われわれの油田には、周恩来総理から直接、こんな内容の至上指令が来ていますよ」

われわれ一行の歓迎宴で、隣に座った大慶油田革命委員会の責任者が、こんな事実を打ち明けてくれた。